

田舎のお母さん

小川未明

青空文庫

奉公ほうこうをしていいるおみつのところへ、田舎いなかの母親ははおやから小包こづつみがまいりました。あけてみると、着物きものがはいっていました。そして、母親ははおやからの手紙てがみには、

「さぞ、おまえも大きおおくなったであろう。そのつもりでぬったが、からだによくあうかどうかわかりません。とどいたら、着てみてください。もしあわないようでしたら、夜分やぶんでもひまのときに、なおして着てください。」と、書いてありました。

おみつは自分じぶんのへやにはいって、お母さんかあからおくってきた着物きものをきてみました。田舎いなかにいるときには、お正月しょうがつになってもこんな着物きものをきたことがなかったと思おもいました。自分じぶんだけでなく、村むらでもこんな美しい着物きものをきる娘むすめは、なかつたのであります。

彼女かのじよは、しばらく自分じぶんのすがたに見みとれていました。ちようどそこへ、坊ちゃんぼっが外そとからたこをとりにはいってきて、おみつのようすを見たので、

「みつ、それを着ると、なんだか田舎いなかの子こみたいになるよ。」といつて、笑わらいました。

おみつも、田舎いなかでは美しいのであろうけれど、都みやこではみんながもつと美しい着物きものを着ていいるから、あるいはそう見えるかもしれないと思おもうと、急きゆうにはずかしくなつて、

「なぜ、お母さんかあはもつとはでなのをおくつてくださらなかつたのだろうか？ わざわざお

くつてくださらずとも、自分がすきなのをこちらでこしらえればよかつたのに……。」「と、
心こころでいいながら、着物きものをぬいで、行李こつりの中なかへしまつてしまいました。

晩ばんになつて、おしごとがおわりました。彼女かのじよは自分のじぶんのへやへはいつてひとりになると、
しみじみとして田舎いなかのことが考えかんがられました。行李こつりから着物きものをとりだしました。村むらからあ
の峠とうげをこして母親ははおやが町まちへ出て、機屋はたやでこの反物たんものを買いかい、家いえにかえつてからせつせとぬ
つて、おくつてくださつたのです。そう考えると、また、いくたびかこのぬいかけた着物きもの
を手てにとりあげて、

「娘むすめにあうかしら？」と、首くびをかしげて見入みいられたであろう母親ははおやのすがたさえ、目めにう
かんでくるのでした。

おみつは、お母さんかあの手紙てがみを着物きものの上うへでひらいて、もういちどよみかえしているうちに、
あついなみだが、おのずと目めの中なかからわいてくるのをおぼえました。

「せっかく、おくつてくださつたのを、きに入いらないなどいつて、ばちがあたるわ。」
そう思おもうと、彼女かのじよは心こころからありがたく感かんじて、すぐにお礼れいの手紙てがみを書かいて、お母さんかあ
に出だしたのでした。

ある日ひ、おみつはお嬢さんじょうのおともをして、デパートへいったのであります。

「そんなじみな着物しかないの？」と、出がけにお嬢さんがおつしやいました。

おみつは、顔を赤くしましたが、心の中で、お母さんのおくつてくださったのを、たとえじみでもなんのはずかしいことがあるうかと、自分をはげましていました。

ひろびろとしたデパートは、いろいろの品物でかざりたてられていました。そして、そこはいつも春でありました。香水のにおいがただよい、南洋できのらんの花がさき、美しいふうをした男や女がぞろぞろ歩いて、まるでこの世の中の苦勞を知らぬ人たちの集まりのようでありました。

「みつや、人がみんな、おまえのふうを見ていくじやないの。そんな田舎ふうをしているからなのよ、みつともないわ。」と、お嬢さんがいいました。

これをきくと、おみつはまだ若い娘だけに、

「いくらお母さんがおくつてくださったのでも、ほかの着物を着てくれればよかった。」と、思いました。

お嬢さんは買い物をして、その包みをおみつに持たせて、それから食堂にはいつておみつもいっしょにご飯をたべ、コーヒーをのんで、休みました。そして、そこを出ました。

「みつや、東北地方の物産の展覧会があるのよ。きつとおまえの国からも、なにか名物が出ていますでしょう。ちよつと見ましようね。」と、いって、お嬢さんは先になつてその会場へおはいりになりました。

おみつも、その後からついてはいりました。

そこには、田舎でつくられたおり物とか、道具とか、おもちゃのようなものがならべられてありました。デパートの他の売り場では見ることができないような、けばけばしくはないが、じみで美しい、おもしろみのある品物がありました。一つ一つ見て歩いていらしたお嬢さんは、ふいに足をとめて、

「ちよつと、ここにならんでいる反物は、おまえの国の町からなのよ。まあ、みつや、この反物は、おまえの着ているのと同じでないこと！」と、お嬢さんはおつしやいました。

おみつもそれを見ると、しまがらがすこしちがつているだけで、まったく自分のと同じ手おり物でありました。つけてあるねだんを見て、お嬢さんは二度びつくりして、

「まあ、高いのね！」と、大きな声でおつしやったので、そばにいる人たちまでが陳列された反物とおみつの着物とを見くらべて、この女中さんはなかなかいい着物を着

ているのだなどいわんばかりの顔つきをしたのであります。

おみつはそれを知ると、はじめて自分がいい着物をきているのを知ってうれしかったというよりか、自分の故郷ではこんないい反物ができるといふことに、誇りを感じたのでした。やがて、会場からだとお嬢さんは、

「ごめんなさい。みつの着ているのが、そんないい品だとは知らなかったので、悪口をいってすまなかつたわ。」と、いつて、おわびをなさいました。

おみつはまた、顔を赤くしました。しかし心のうちでは、喜んでいたのであります。そして、お母さんをほんとうにありがたくなつたかしく感じました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

底本の親本：「未明ひらかな童話読本」文教書院

1936（昭和11）年3月

初出：「台湾日日新報」

1936（昭和11）年3月24日

※表題は底本では、「田舎《いなか》のお母《かあ》さん」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年6月9日作成

2016年6月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田舎のお母さん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>